特選

潜むもの

正法寺町
髙井　豊

雲のながれは初冬の兆しだ
樹は　はやくも季節を捉え
おのれの　すべての葉を削いでいく

ふと
感じるのだ
おそれに近いものを
このひび割れた樹皮の下に潜むものに―。

（評）生きていく日々人は気づきます。人間だけがこの世に生きているのではなく　目に見えているものだけが存在しているのではないと。その時精神世界は遠く豊かに広がりゆき作者も又畏敬の念をもってひび割れた樹皮の奥に向きあって立っています。

いつもの道筋で
その樹の下を通り抜けようとすると
落ち葉が弧を描いて落ちてくる
ひとつは　頬をかすめた

手にとると少女の掌ほどの楓の葉で
臙脂色の濃淡が滲み出るように重なり
葉脈に沿った虫食いの痕は
棲むものからの
メモのようで
捨てきれず
胸のポケットにしまった

特選

みじかい言葉

西今町
谷口明美

朝の食卓に
赤やみどりの野菜をもりつけ
牛乳をあたためるころ
きまって　その人から電話がかかってくる
「きょうも　大丈夫だよ」
三度目の退院の車中で
心配だからと
さりげなく交わした約束だった
ただ　これだけの言葉に安らぎ
朝のしごとを始める

とどかない日
わたしは焦がれる
よからぬ憶測にかられたり
ふだんはやり過ごす片づけごとに
手を預け　せかせかと動く
（たずねてみようか
　いや　そのうちに届くだろう）
くりかえし自答しては　時の長さを計る

二人で
青竹を切り倒し　傷つきながら
終日　夢中で試行錯誤の竹橇を作った
姉であるわたしの発案だった
山の白い斜面を疾走し
雪まみれになって笑い転げた
貧しい戦後の小学生のころだった

待ちきれず　受話器に問う
「まだ　がんばれる」の短い応えに
息をしずめながら
やさしく包みかえす言葉をさがす

（評）作者には毎朝の無事の連絡を待つ殊の外気がかりの人がいて　第一連で「その人」と表していますが　それは作者の弟あるいは妹だとわかります。情に湿らさず「その人」としたことでこの作品の上質さが輝きます。

特選

石けんの木

古沢町
真野　美栄子

通りがかりの花盛りの木に　目をうばわれ
立ち止まれば　偶然にも　知人宅の庭先
〝わあ、もしかして　石けんの花…〟
その花姿が　忘れてた幼い日の光景を

里の裏山へ登る口にあった　石けんの木
田植え頃　　どの枝からも細い花茎のばし
五、六輪　白い小さな花が垂れて咲き
夏休みに入る頃　　大豆大の卵型で
あさぎ色の実へとかわる
その実を　我先に
ポケット一杯　摘みとり　川端へ走る
てんでに　一粒ずつ　指と手でつぶし
こすりあわせ　泡立ちはじめると　歓声が
どれだけ　泡立てても　誰にも叱られない
石けん遊びが延延と　日のあたる川端で続く

七月の終り　そっと　その木を覗きに
すると　心ひそかに思い描いてたとおり
花は　あさぎ色のかわいい実になり
かすかにゆれながら　待っててくれた
おかっぱ頭の私が　ぶらさがっている
あそこに　ちーちゃん、まあちゃんも

どれ程　惚けて見てたのだろう
いつの間にか　知人がそばにいて
「思ってた実になってた？　私の里、富士では
よくある馴れ親しんだ木なの、それで
植えたけど　実が泡立つとは知らなかった
あなたの　ゆたかな思い出に　どうぞ」と
実たわわの枝を　惜し気なく
たおって　持たせて下さった

長い年月、目にも手にも　ふれなかった
石けんの実が　花びんの中から　誘う
ためらいつつ　あの頃のように　数粒手に
こすりだすと泡、泡、その泡につつまれ
また　遠い日の場景が　幾重にも

※「石けんの木」→「えごの木」と知人に
正しい名を教わる

（評）「あなたの豊かな思い出に」と手折って手渡された石けんの木の枝。声を上げてあぶくだらけを楽しんでいる子供たちの光景が目に浮かぶと共に「あなたの豊かな思い出に」と知人に言わせる作者の人となりもあたたかく想像させられます。

入選

私の風呂敷

東近江市
辰巳　友佳子

式を挙げこの地に住むことになった私はお義母さまと実母に伴われて、三人着物を着て町内中ねり歩く。「不束者でございますがどうぞよろしくお頼み申します」と私達は深々と頭を下げ、風呂敷（これで粗を隠しておくれやす）をご近所さまに手渡しする。これが「隣歩き」というもので、嫁としての最初の行事である。

家には使われなくなったたくさんの頂き物の風呂敷がある。お義祖母さまの代のものやらお義母さまの代のもの。お義祖母さまらの地鳴りのような声がゴソゴソ聞こえている。

私の鞄にはいつも義妹の風呂敷が入っている。義妹のお母さまから直接手渡された。鮫小紋柄で使いやすい。改めて広げてみると私の湿ったコトバが聞こえだす。私の風呂敷もそうしてほしいと願いながら、義妹の風呂敷を塵払いして干した。

（評）二人のハハと行う「隣歩き」という嫁としての最初の努め。実母は母（ははは）義母もハハ。そして義妹も作者も絶対的に嫁なのです。嫁となって配り配られる風呂敷は「嫁」という不条理を黙って包んできたと読者は知ります。

入選

北越の街サパ

東近江市
前川　利孝

牛追いの童が巧みに何頭か水牛を引き連れ
道いっぱいに向こうからやって来る
私は道をよけ足元の牛の糞で滑りよろける
水牛は道端の草を食べつくす
この村には
人手での草刈りは要らないのだろう
ニワトリが足元を駆け巡り
こぼした穀物を掃除してくれる

ここはサパ
ベトナム北境の街
長い間の幾多の戦争で追いやられた
少数民族が
山へ山へと棚田を築く
何も要らない自給自足生活がここにある

男はトウモロコシで酒を造る
強い酒だ
女は麻で着物を編む
色鮮やかだ
子沢山
兄姉は弟妹の世話をする
弟妹は兄姉の言う事を良く聞き
手伝いに精を出す

今私はここに降り立ち
地域に融けこむ算段を計るが
旅行者でしかなりえない自分に気付く

（評）文明の国から降り立った後進の村には　もはや自分たちには取り戻し難い豊かささえ見受けられるけれど旅行者は旅行者だとの自覚によってこの作品は単なる紀行詩を脱けています。

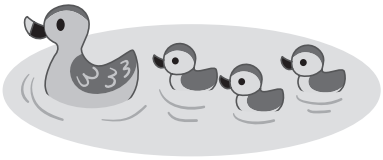
入選

僕の輝いた明日

犬上郡豊郷町
藤田始宏

「明日は明日の風が吹く」というけれど
輝かそうと思わなければ輝かない
それが明日というものだ

（評）詩作品にはそのタイトルが単にタイトルにとどまらず　分かち難い詩行となっているものがあります。この作品はまさにそれで「僕の輝いた明日」と未来を過去形で語ることによって（大ゲサに言えば）哲学と文学がここにあると思わせます。



入選

ちょっとのま

西今町
やまかみ　まさよ

おはようさん
星たちに声かけをする
凜として　ツンとしているのもある
いつものように　はきなれた靴で
朝いちばん　青柳橋を渡る

車はまだ行き交わない頃合
手元のペンライト　と
対向車のヘッドライトのすれ違い
すべての音をかきけして黙々と
明けようとしていく空を　時おり見上げては
自分の眼が
あたりになじんでいくのがわかる
歩みをゆるめて　道端の
スイセンの白さを手折る

樹々の
細い枝、枝のからまりと空との境目が
朝の恋文（ラブレター）のように
しだいに　うかびあがってくる

冬鳥はこの明るさがテリトリーで
啼いて呼んで　きかせてくれる

カラスもスズメもまだ　ねむったまま
あけぼのいろに目が慣れてきて
けものの眼になっていく私
澄んだ空気の中　ひとり歩く

（評）一日24時間は誰にでも与えられているものですが　この作品のようにして始められる一日はしあわせだなあと思われます。「星」も「空」も「スイセン」も「樹々」も「澄んだ空気」という言葉たちも　幸福に光ります。

佳作

童子に還れる日

稲里町
川村利男

佳作

祈り

西今町
花井守人

佳作

ふるさと

犬上郡豊郷町
諸岡　レイ子

佳作

魔法が解けた

日夏町
寺村　しげる

佳作

桜酒（さくらざけ）

芹橋一丁目
楠亀　美恵子

《総評》

前回に比してたくさんの方の御応募感謝いたします。

応募の御作品群を前にして　今回くっきりと言葉たちの幸福と言うことが目の前に浮かびあがってきました。昨今の世情で飛びかっている　あったことをなかったことに　言ったことを言わなかった　したことをしなかったとして発せられている言葉たちの痛ましさ。非情非礼に扱われている言葉たちに比して　お作品の言葉は自らの内から清潔にあふれてどこまでも大切に発せられています。

言葉たちの幸福。

選をさせていただく限り　特選入選佳作選外と分けられてしまいますが　本来お作品に順列などないのです。

生きる日々　内なる自身を言葉に記し自身の作品に胸打たれるなら　作品も作者も幸福です。

幸福な言葉たちを紡いで下さい。

（山本　英子）

選者詩

なつかしく・かなしく

石内秀典

急な流れには
上流を見据えて立つのだ

ウグイが走り
光が渡る川なかで
ユキちゃんは懸命に立っていた

わら草履が脱げかけるのを
必死に
こらえながら立つぼくらは
ズック靴の
ユキちゃんの
小さな手を握る

足裏を
小石が流れ
少しずつ渡るユキちゃんを
ぼくらは必死に支えた

爆撃を受けた街から
一人疎開してきたユキちゃん

川を泳ぎ
魚を追いかけるぼくらを
わずかに火薬のような匂いのする
風が蔽う
堰提一面の葛の匂いだ

その草いきれを
ユキちゃんは恐れた

コウノトリ

尾崎与里子

早春の湖北の空を
悠然と舞っているコウノトリに
「今頃になって謝りに来たの？」
と声をかける
いつからだろう
私はずっと
生まれた場所を間違えたような気がしていた
生きてきた不遇な時間にも
ずっと違和感を持っていた

どこかに本当の私が
もっといきいき過ごせた場所があったはずだ
美しい表情で話し
さりげない献身と努力を惜しまず
優しさに満ちて
充足した一日を終える場所
怠惰や蛇足や過剰な行動からは遠く離れ
静かな祈りに満ちた場所

きっとおまえが間違えて
こんなところへ落としていったせいで
私は
取り返しのつかない愚かな失敗を繰り返し
人を傷つけ　人生を浪費し　散らかし
何ひとつ戻す術を知らないまま
老い始めている

「今頃あやまりに来たって…」
山の里の乾田に
大きく美しく一本の脚で立っている
コウノトリ

音

山本英子

風の強く吹く日のレストランで一人　食べつくした皿にナイフとフォークを置いた時などに

鹿がかつて遠い世にも鹿であったならば女も
又かつての世に女であっただろう　されば鹿
ははるかの世までなおも鹿であり　女も又後
の幾世も女でなければならない　即ち鹿は鹿
のまま　女は重ねて女であり　鹿と女はつい
に女と鹿に届かない　鹿が涙を流す位置に女
が立った日暮れ　五本の指のようにやさしく
街は食事をとっていた

街で幾度か私は女を見た　紙袋抱えて立ちつ
くす私を過ぎ　女はきまって一人を背負い一
人の子の手を引いて　鹿と並んで白い息を吐
き残していった

長い余生という概念を初めて私に教えた人が
誰だったか今は思い出すこともないが　鹿と
共に遠くなっていくまだ若いその女は　確か
にもはや余生しか生きていなかった　女は熟
れきらずしていかなる火にか煽られ　そして
女の若くして燃えつきた一部始終を　鹿は黙
ってみてきたに違いない

女と鹿が寄り添って私の晩秋を　時に　行く